2021.9 No.207

平和文化

公益財団法人 広島平和文化センター　　題字　松井一實 会長

被爆７６年　平和記念式典

―「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」、これは思い出したくもない辛く悲惨な体験をした被爆者が、放射線を浴びた自身の身体の今後や子どもの将来のことを考えざるを得ず、不安や葛藤、苦悩から逃れられなくなった挙句に発した願いの言葉です。―

被爆から76年目の8月6日（金）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、被爆者や遺族、来賓など約750人が犠牲者の冥福と世界恒久平和を祈りました。昨年に引き続き、今年度の式典も新型コロナウイルス感染拡大防止のため規模を縮小して開催されました。

式典は午前8時に始まり、最初に松井（まつい）広島市長と遺族代表2人が、この1年間に亡くなられたことが確認された4,800人の氏名が記帳された2冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は328,929人、名簿総数は121冊となりました。

続いて山田（やまだ）広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された8時15分に、遺族代表の村田英美（むらたひでみ）さんと、こども代表の石田渚（いしだなぎさ）さんが平和の鐘をつき、参列者全員が1分間の黙祷（もくとう）を捧（ささ）げました。

この後、松井市長が平和宣言を行いました。宣言の中で市長は、各国の為政者に、他国を脅すのではなく思いやり、長期的な友好関係を作り上げることが、自国の利益につながるという人類の経験を理解し、核により相手を威嚇し、自分を守る発想から、対話を通じた信頼関係をもとに安全を保障し合う発想へと転換するよう強く求めました。

また、日本政府には、被爆者の思いを誠実に受け止めて、一刻も早く核兵器禁止条約の締約国となるとともに、これから開催される第1回締約国会議に参加し、各国の信頼回復と核兵器に頼らない安全保障への道筋を描ける環境を生み出すなど、核保有国と非核保有国の橋渡し役をしっかりと果たしていただきたいと述べ、さらに、平均年齢が84歳近くとなった被爆者を始め、心身に悪影響を及ぼす放射線により、生活面で様々な苦しみを抱える多くの人々の苦悩に寄り添い、黒い雨体験者を早急に救済するとともに、被爆者支援策の更なる充実を強く求めました。

式典には24都府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランス、ロシアを含む83か国と欧州連合（EU）の大使や代表が参列しました。

式典で読み上げられた「平和宣言」、「平和への誓い」の全文は、広島市ホームページから閲覧できます。

平和宣言を行う松井市長

（総 務 課）

目　次

被爆76年　平和記念式典 …… 1
「平和に向けての新たな地平＝平和文化の振興」（小泉崇）／平和首長会議が新ビジョン・行動計画を策定 …… 2
子どもたちの平和のメッセージ展／ピースナイター2021／被爆体験記朗読会を開催しています …… 4
「被爆75年、真珠湾から被爆の実相を発信」（滝川卓男） …… 5
平和記念公園を英語で紹介（ユースピースボランティア）／海外へのオンライン被爆体験証言 …… 7
被爆体験伝承者から（辻靖司さん）／被爆体験記の執筆をお手伝いします …… 8
資料館「新着資料展」／資料館企画展「焼け跡もの語り」 …… 9
海外からの来訪者が発信するメッセージ／広島市・安芸郡外国人相談窓口 …… 10
「広島市民じゃけえ!」（マーク・マクフィリップスさん）／本財団と長崎大学核兵器廃絶研究センターが連携を拡充 …… 11
平和文化センターで働いてる人ってどんな人? …… 12
施設紹介・広島国際会議場／国際平和シンポジウム …… 13
青少年による平和活動報告会／ヒロシマ平和行政実務者研修 …… 14
被爆体験証言者・伝承者の委嘱／資料展「紙芝居 はだしのゲン 複製原画展」「青葉したたる 平和大通りの出来るまで」 …… 15
へいわこうえん日本語教室・日本語ボランティア養成講座／ひろしま奨学金奨学生決定 …… 16

（公財）広島平和文化センター　〒730-0811　広島市中区中島町１番２号
TEL（082）241-5246（代表）　FAX（082）542-7941　E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
令和３年（2021 年）９月／年３回発行　［URL］http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/
再生紙を使用しています

平和に向けての新たな地平＝平和文化の振興

平和首長会議事務総長
小泉（こいずみ）　崇（たかし）

7月7日、従来の2020ビジョンに代わる「持続可能な世界に向けた平和的な変革のためのビジョン（略称PXビジョン）」がオンラインで開催された平和首長会議理事会において策定されました（詳細次項参照）。この日はいみじくも4年前に「核兵器禁止条約」が採択された日に当たります。

この新ビジョンでは「平和文化の振興」という目標が新たに打ち出されました。8月6日に松井（まつい）広島市長（平和首長会議会長）が行った平和宣言では、「為政者を選ぶ側の市民社会に平和を享受するための共通の価値観が生まれ、人間の暴力性を象徴する核兵器はいらないという声が市民社会の総意となれば、核のない世界に向けての歩みは確実なものになる」とし、「世界中で平和への思いを共有するための文化、『平和文化』を振興し、為政者の政策転換を促す環境づくりを進める」必要が述べられています。ここに「平和文化の振興」という市民社会にとってより根源的な目標を含むものとなった新ビジョンの意義が端的に述べられていると思います。

これまでビジョンの中心的な柱となっていた「核兵器のない世界の実現」は全人類に課せられた課題といえるものであり、また、第二の柱である「安全で活力のある都市の実現」は地域ごとに異なる多様な課題への取組を重視したものでした。これに対し、新たな柱である「平和文化の振興」は、世界的な規模の平和という含意を持ちつつも、肝心なのは市民一人一人による日常生活の中での取組にあると思われます。その意味で、「平和文化」は内容として多様であり、誰もが自らにとっての「平和文化」という独自性を持ちうるものです。そして、その「振興」とは、今までとは違った何か特別なことをすることではありません。

例えば、被爆者の方が「こんな思いを他の誰にもさせてはならない」との思いから被爆体験を語ることは「平和文化の振興」に当たるでしょう。また、より身近な例として、各自が自らの幸福、あるいは各家庭の平和や幸福を追求することも立派な「平和文化の振興」に当たるものだと思います。なぜなら、そうした行為がすべからく「平和」に繋（つな）がっていくと思うからです。このように「平和文化の振興」は、人種、性別、年齢などの別を問わず、どの都市の誰もが取り組める「平和活動」であることから、新ビジョンは「平和に向けての新たな地平を開く」ものであると考えます。

平和首長会議は、1982年6月24日、当時の荒木（あらき）広島市長が国連軍縮特別総会で世界の都市に国境を超えて連帯し、共に核兵器廃絶への道を切り開こうと呼び掛けたことに端を発し、1985年に第1回世界平和連帯都市市長会議の開催として結実、明年で40周年の佳節を迎えます。この機会を捉え、平和首長会議は核兵器のない平和な世界を目指し、「平和文化の振興」を大いに宣揚していくべきであると考えます。

（令和3年8月）

平和首長会議が新ビジョン・行動計画を策定

第１２回平和首長会議理事会を開催

平和首長会議はこれまで、被爆者の存命のうちに核兵器廃絶を実現したいとの願いから、2020ビジョンの下で核兵器廃絶に向けた様々な取組を進めてきました。この2020ビジョンが昨年末をもって終了したため、7月7日に広島市・長崎市をはじめ18の役員都市の参加を得て第12回平和首長会議理事会をオンラインで開催し、全会一致で新ビジョン及び2025年までの行動計画を策定しました。

理事会の出席者

ＰＸビジョン

新ビジョンの名称は、核兵器を廃絶し、人類の共存が持続可能となることにより、あらゆる人が永続的に平和を享受できる世界、すなわち「世界恒久平和」を実現するために、市民が連帯する都市を創造するという観点から、「持続可能な世界に向けた平和的な変革のためのビジョン―都市による軍縮と人類共通の安全保障に向けた平和構築―」としました。（略称：PXビジョン／英語名：Vision for Peaceful Transformation to a Sustainable World）

このPXビジョンでは、世界恒久平和への道筋として、「核兵器のない世界の実現」、「安全で活力のある都市の実現」、「平和文化の振興」という三つの目標を掲げています。

A 核兵器のない世界の実現

都市とその市民が標的となり、使用の影響が地球規模となる核兵器は、市民の安心・安全な生活を脅かす最大の障壁であるため、国連・各国政府とりわけ核保有国及びその同盟国に核兵器廃絶に向けた行動を要請することにより、為政者の政策転換を促します。

B 安全で活力のある都市の実現

市民の安心・安全な生活をより確かなものとするため、人類の共存を脅かす飢餓・貧困等の諸問題の解消さらには難民問題、人権問題の解決及び環境保護といった地域ごとに異なる多様な課題に取り組みます。

C 平和文化の振興

核兵器廃絶に向けた為政者の政策転換を促す環境や、人類の共存に向けて連帯する市民社会をつくるため、市民一人一人が日常生活の中で平和について考え行動するという、より根源的に重要な「平和文化」を市民社会に根付かせ、平和意識を醸成していきます。

平和首長会議行動計画（2021年－2025年）

ビジョンと併せて策定した行動計画は、都市がそこに居住する市民を核兵器の脅威から確実に守るとともに、人類の共存を持続可能とするため、ビジョンの三つの目標の下で加盟都市と共に進める取組を掲げています。

1 被爆者の思いの共有

「A 核兵器のない世界の実現」では、“被爆者の思いの共有”を根底に据えて取組を進めていくこととしています。

具体的には、被爆者が長年訴えてきた核兵器廃絶に向けて、今年1月に発行した核兵器禁止条約の影響力を最大限まで高めるために、批准国の拡大を促進していきます。そのためにも、核保有国及びその同盟国に対して、まずは締約国会議へオブザーバーとして参加すること、そして、同条約の実効性を高めていくための議論への参画や、普遍的な核軍縮体制の確立に誠実に取り組むことを要請します。

また、NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議や核兵器禁止条約締約国会議等の核軍縮に関する国際会議など様々な機会を捉え、被爆者の切なる願いを礎として、核兵器廃絶に向けて核軍縮を進展させていくため、「核抑止からの脱却」、「NPTが課す核軍縮義務の遂行」及び「被爆地訪問」の必要性を訴え、相互協力に基づく安全保障体制を実現するよう国連・各国政府に要請していきます。

さらに、幅広い市民による為政者の政策転換に向けた働き掛けとして、全ての国に核兵器禁止条約の早期締結を求める署名活動を引き続き実施していきます。

2 持続可能な地球・社会への貢献

「B 安全で活力のある都市の実現」では、国連が掲げる持続可能な開発目標（SDGs）の遂行により“持続可能な地球・社会への貢献”を果たすことを目指し、テロ、難民、環境破壊、多様性と包摂性の軽視等の諸問題が解決されるよう、世界の各地域で取組を推進していくこととしており、現在、世界各地に24あるリーダー都市が、それぞれの地域の実情に沿った主体的な活動を展開していきます。

3 国際世論の醸成・拡大

「C 平和文化の振興」では、「核兵器のない世界の実現」と「安全で活力のある都市の実現」を支えるために、世界恒久平和を希求する“国際世論の醸成･拡大”を進めることが重要と考え、三つの取組を推進していくこととしています。

まず、より多くの市民に平和の尊さについて考えてもらい、市民社会における平和意識を醸成するために、芸術やスポーツなどを通じた多様なイベントを開催するとともに、国際的な平和研究機関との連携の下、核兵器に関する情報をホームページやメールマガジンなどにより発信していきます。

また、より多くの市民に被爆や戦禍の実相について理解を深めてもらうために、ポスター展の開催や被爆体験・戦争体験講話を聴講する機会を提供します。

さらに、次代の平和活動を担う青少年に、被爆の実相についての理解を深めるとともに平和の尊さについて考え、核兵器のない平和な世界に向けて主体的に活動してらうために、「子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト」を始めとした平和教育の充実や平和･軍縮教育の普及などの取組を推進します。

4 持続可能な組織づくりの推進

こうした取組を継続的に展開していくためには、“持続可能な組織づくりの推進”が不可欠であり、ここでは「加盟都市の拡大」、「加盟都市における活動の充実」、「多様な主体との連携」、「事務局機能の充実」、「財政基盤の充実」の五つの取組を推進していくこととしています。

具体的には、1万都市加盟を目指して加盟都市を拡大しながら、それぞれの活動を充実させるとともに、国際的な機関やNGO、平和研究機関などと連携していきます。

また、ソーシャルメディアを活用した情報発信の強化や平和首長会議の活動をより多くの人に知ってもらい、賛同者を増やして寄付金などの支援を受けられるようにするための広報活動の推進などに取り組みます。

平和首長会議は、この度策定したPXビジョン及び行動計画に基づき、加盟都市と共に世界恒久平和の実現に向けてたゆまず行動していきます。

（平和首長会議運営課）

「子どもたちの平和のメッセージ展」の開催

広島市内のほか、全国の59団体の子どもたちから平和への思いを込めたメッセージを集め、8月6日（金）に平和記念公園内に展示しました。

この展示は、例年、「ひろしま子ども平和の集い」として平和記念式典に参列する他都市の子どもたちと広島の子どもたちが一堂に会して平和のメッセージを発信する事業がコロナ禍で中止となったことに伴う代替事業として、昨年度に続き、開催しました。

寄せられたメッセージには「ヒロシマを“自分ごと”に」、「争いのない平和な町にする」など、平和な未来へ向けた思いが綴（つづ）られていました。

展示したメッセージ

コロナ禍の今年、子どもたちが一堂に会することはできませんでしたが、心を一つに広島の地から平和のメッセージを発信することができました。

（平和市民連帯課）

「ピースナイター2021」の開催

8月21日（土）、本財団と生協ひろしま等との共催により、広島東洋カープの試合の場を活用し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを発信する「ピースナイター２０２１」をマツダスタジアムで開催しました。14回目を迎えた今回は、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、入場者数が制限される中での開催となりましたが、昨年度に続き、「継承」をテーマとし、松井（まつい）広島市長や湯崎（ゆざき）広島県知事による平和を願うメッセージを放映するとともに、広島東洋カープの監督、選手がユニフォームにピースワッペンを装着して試合に臨みました。約5千人の観客と選手が一体となり、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向け平和のメッセージを発信しました。

ピースワッペン

（平和市民連帯課）

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
被爆体験記朗読会を開催しています

被爆者とその家族などが記した体験記には、被爆の実相を知る者のみが書きうる真実や心情が綴（つづ）られ、胸を打たれます。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、こうした体験記や原爆詩を読み語ることによって、多くの人々が被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へ継承していくことを目的として、「被爆体験記朗読会」を開催しています。

朗読会の様子

朗読会では、原爆被害の実相を映像で紹介した後、被爆体験記朗読ボランティアが被爆体験記・原爆詩の朗読を行い、最後に参加者自らが原爆詩を朗読します。被爆当時の状況を想像しながら朗読を聴き、また実際に声を出して読むことにより、書き記された被爆体験が臨場感をもって伝わり、被爆者の悲しみ、苦しみや平和への思いが心に染み込みます。

８月５日、６日には、平和記念公園を訪れる方々に自由に参加していただけるように、１日２回、合計４回の朗読会を開催しました。親子連れや平和学習のために広島を訪れた学生など、延べ143人の方に参加いただきました。参加された方からは、「被爆者の悲しみがよく分かった」、「実際に声に出して読んでみると、思いがあふれて涙が出た」などの感想が寄せられました。

追悼平和祈念館では、毎月第３日曜日に開催している定期朗読会のほか、修学旅行や平和学習等で平和記念公園を訪れる児童や生徒を対象にした朗読会、広島市内外の学校等へ出向いて行う派遣朗読会など、さまざまな朗読会を開催しています。気軽に当館までお問い合わせください。

【お問い合わせ】国立広島原爆死没者追悼平和祈念館／ TEL（082）207 － 1202

被爆75年、真珠湾から被爆の実相を発信

―戦艦ミズーリ記念館で「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を開催―

広島平和記念資料館長
滝川（たきがわ）　卓男（たくお）

被爆75年の2020年8月13日から、日米開戦80年の2021年2月27日まで、日米開戦の舞台となったハワイ・真珠湾（しんじゅわん）に係留されている戦艦ミズーリ記念館において、「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を開催し、被爆した実物資料等20点、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネル30点を展示して被爆の実相を発信しました。

戦艦ミズーリ記念館

まず、戦艦ミズーリ記念館を紹介します。

日米開戦からおよそ4年後の1945年9月、戦艦ミズーリにおいて日本の降伏文書調印式が行われました。ミズーリは退役後、1998年に真珠湾に係留され、翌年から記念館として一般公開されています。

降伏文書調印式会場となったデッキ、16インチの主砲や上級士官の食堂などが艦内の見どころですが、神風特攻機衝突跡（カミカゼデッキ）を見ることもできます。1945年4月の沖縄海域での戦闘で、1機の特攻機が右舷艦尾付近に突入し火災が発生。消火作業後にデッキ上で発見されたのは、特攻隊員の上半身のみの遺体でした。乗員は遺体を速やかに片付けようとしましたが、ウィリアム・キャラハン艦長は「亡くなった今はもはや敵ではなく、祖国のために戦った彼の行動は尊敬に値する。水葬を行う。」と周りを説得し、翌朝、多くの乗員が見守る中、水葬が行われました。衝突跡は修理せずそのまま残されています。

戦艦ミズーリ記念館（戦艦ミズーリ記念館提供）

コロナ禍の中で開催

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、原爆・平和展は波乱の開催となりました。

まず、当初の予定より約1か月遅れて2020年8月13日からの開催となり、例年ならば現地で行う被爆体験証言も8月21日に広島からオンラインで行いました。その直後から再び現地で感染が拡大し、8月27日に戦艦ミズーリ記念館は閉館となりました。

この先いったいどうなるのだろうと途方に暮れる日々が続きました。出勤すれば直ぐにパソコンを開き、現地の新型コロナウイルスの最新情報を確認する毎日でした。なかなか感染状況は収束せず、再開したのは年の瀬も押し迫った12月16日でした。

週4日間のみの開館となりましたが、当初の11月末までの開催予定を2021年2月27日まで延長し、どん底から這（は）い上がれた気持ちになりました。

原爆・平和展の様子（戦艦ミズーリ記念館提供）

来館者の反響

「Of Silhouettes and Ash（シルエットと灰）」と題した展示会で資料やパネルは展示され、2019年6月に戦艦ミズーリ記念館が遺族から受領した佐々木禎子（ささきさだこ）さんの折り鶴も併せて展示されました。

来館者は約13,500人で、そのうち半数が20代以下の年齢でした。

来館者の主なアンケート結果は次のとおりで、被爆の実相を十分に発信できたのではないかと思っています。

○ 原爆展の内容はいかがでしたか。

分かりやすい83.8%で、まあまあ分かりやすい13.1%を加えると96.9%でした。

○ 原爆及びその被害に関する理解が深まりましたか。

非常に深まった66%で、ある程度深まった25.8%、少し深まった6.2%を加えると98%でした。

○ 核廃絶への理解が深まりましたか。

非常に深まった58.2%で、ある程度深まった30.8%、少し深まった4.4%を加えると93.4%でした。

原爆やその被害、核兵器への理解が深まった割合が90%を超えました。

○ 意見、感想を聞かせてください。

「被害の状況を知ることは歴史を理解する上で重要だと思います」「史実を伝えることが大事だと思います。私たちは決して忘れてはいけません」「もっと展示の数があればよかったです」などの感想が寄せられました。

戦艦ミズーリ記念館からのメッセージ

マイク・カー会長兼最高経営責任者

戦艦ミズーリ記念館は、1945年の広島・長崎への原爆投下により命を落とした方々や最愛の人を亡くした方々に敬意を表し、新しい特別展「シルエットと灰：ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。来訪者には、この特別展を通して、日本とアメリカの強いつながりや結びつきを感じていただくことができました。当館において、壮絶な体験を紹介し、歴史上の重要な時代を記念する展示を開催することができました。資料を貸してくださった広島平和記念資料館及び広島・長崎両市の協力に感謝しております。

ハイディ・ムーニー／ツアーガイド

戦艦ミズーリ記念館で特別開催されていたヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展を目にすることができて、とてもありがたかったです。私は長年日本に住んでいましたが、広島や長崎まで行ったことはありませんでした。この展示を通して、私は原爆の多くの側面を目の当たりにしました。それは、これまで知らなかった事実でした。核戦争の危険性について啓発するために尽力してくださって、ありがとうございます。

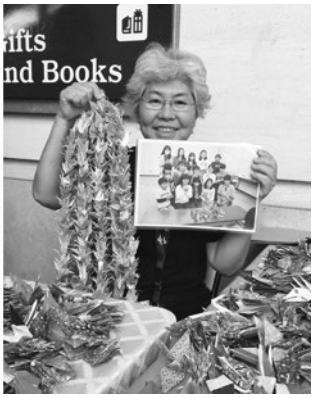
ハワイと結ぶオンラインイベントの開催

戦艦ミズーリ記念館とは「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」開催後も連携して戦争体験の継承に取り組んでいくことにし、その一環として、今年7月10日に、同館と共催で「戦争の記憶を伝え、平和の種をまく」をテーマとして、ハワイ在住の2人からお話を伺うオンラインイベントを開催しました。

高知県出身で2005年にハワイへ移住して以降、戦艦ミズーリ記念館のツアーガイドを務めている前田敦（まえだあつし）さんからは、戦艦ミズーリに関するお話と、「平和であることを当たり前と思わずに、平和であることは実は非常に恵まれていて大切にしなければならない」という思いを聞きました。

広島市出身の被爆二世で長年にわたり平和活動に取り組んでいる元高校教員のピーターソン・ひろみさんからは、家族の被爆体験、真珠湾でのサダコプロジェクトなど、平和の実現に向けて行動できる人材の育成と、「私たち一人一人が平和を考え、行動する人になりましょう。みんなが少し動けば、社会も少し変わります」という思いを聞きました。

同イベントの参加者は267人で、「現地で暮らし、活動されている方の生の声を聞くことができ、本当に貴重な機会でした。お二人の素直な言葉が胸に響きました」「海外から見た広島・日本への視点はとても新鮮で、まだまだ課題多しと気づかせていただきました」などの感想が寄せられました。また、今後も海外原爆展を開催した館の話を聞きたいとの要望も多くみられました。



前田敦さん（左）、ピーターソン・ひろみさん（右）

ハワイでの支援

広島からハワイへ本格的移民が始まったのは1885年、広島市がホノルル市と姉妹都市提携をしたのは1959年、広島とハワイの結びつきは長きにわたります。

今回の原爆・平和展開催に当たり、ホノルル市、ホノルル広島県人会には、ホノルル市民へのPR活動など熱心な支援をいただきました。

当初、ホノルル市庁舎での原爆パネル展や県人会会員による対面での被爆体験証言を実施する予定でしたが、コロナ禍により叶（かな）いませんでした。残念でなりませんが、今年3月に県人会から感染防止のマスクをいただくなど、ハワイと当館との新たな結びつきも生まれました。

ホノルル広島県人会から寄贈されたマスク

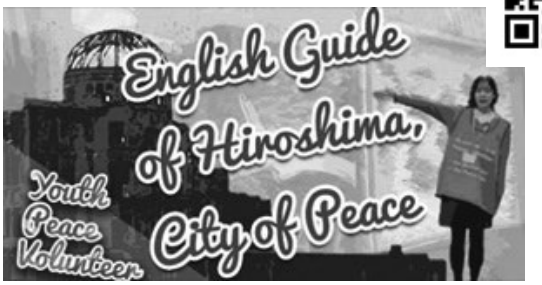
世界中を襲っている新型コロナウイルスの影響を真面に受けながらの原爆・平和展の開催でしたが、様々な成果を得ることができたのは、関係者の皆様の熱意と支援のおかげであり、改めて感謝申し上げたいと思います。

（令和3年8月）

平和記念公園を英語で紹介するユースピースボランティアの活動

本財団では、次代を担う広島の青少年が平和の大切さを学ぶとともに、海外からの訪問者にヒロシマの心を伝える機会を創出するため、平和記念公園を訪れる外国人に対して被爆の実相を英語で伝えるボランティアガイドを育成し、その活動を支援する「ユースピースボランティア事業」を実施しています。

2年目となる令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、外国人観光客へのボランティアガイドができなかったため、平和記念公園内の原爆死没者慰霊碑や原爆ドーム、被爆アオギリなど10か所を英語で紹介する動画（URL: https://youtu.be/xOXheWj-Eq4）を作成しました。



ユースピースボランティアが作成した動画のタイトル画像

活動開始に向けたユースピースボランティアの研修会

今年度は、新規に37名（高校生21名、大学生16名）が、ユースピースボランティアの研修に参加しています。7月18日（日）に開催した第1回研修会では、活動のイメージを掴（つか）むとともに、被爆の実相についての理解を深めました。最初の平和学習講座では、原爆投下までの過程や原爆による被害、現在の国際社会の動きを学びました。聴講した学生からは、「知らないことがたくさんあった。これからも学びを深めていきたい」との感想が聞かれました。続いて、先輩のユースピースボランティアから、実際にガイドする際の声掛けの実演やコロナ禍の中で作成したガイド動画の説明を聞きました。新規メンバーは、先輩メンバーから経験を踏まえた説明やアドバイスを受け、ガイド活動への不安が解消され、コロナ禍の中でも様々な活動に取り組んでいきたいという思いが生まれたようです。最後に、英語による被爆体験講話を聴講し、被爆者の実体験とともに被爆体験を話すことの葛藤や思いを学びました。初めて被爆体験を聴いた学生もおり、「とても貴重な体験だった。被爆者の思いを伝えていきたい」とガイド活動への思いを新たにしていました。

今後は、原爆死没者慰霊碑等を英語でガイドするために必要な知識やスキルを学び、活動開始に向けた準備を進めます。

（平和市民連帯課）

海外へのオンライン被爆体験証言
～コロナ禍で広がる新しい継承の形～

平和記念資料館では、オンラインで広島の被爆者と世界各国の人々を結び被爆体験証言を聞いていただく、「海外へのオンライン被爆体験証言」を、平成22年度（2010年度）から実施しています。

海外にいる方を対象とし、聴講者が10人以上いれば無料で実施することができます。参加者は自国にいながら被爆者とつながって生の声に触れ、質疑応答時間を通して双方向の交流を持つことができます。

昨年来の新型コロナウイルスの感染拡大の中にあっても、被爆者の声を世界に届け続けるため、オンラインはますます重要なツールとして広がりを見せています。当館でも昨年度からその環境整備にさらに力を入れています。一昨年までは年間10回前後のオンライン証言を実施してきましたが、昨年度の実施はその約倍となる23回にのぼりました。今年度も増加傾向は続き、8月末時点で、既にアメリカやハンガリーなど8か国に対して13回のオンライン証言を行い、およそ550人が被爆者の声に耳を傾けました。

聴講者は、核兵器を持つ国、持たない国、核の傘の下にある国など、地域も背景も、また年齢層も様々です。

6月、感染症対策を行いながら、ボスニア・ヘルツェゴビナの人々にオンラインで被爆体験を語る小倉桂子（おくらけいこ）さん

2年連続でオンライン証言を申し込んだアメリカの大学教授は、証言は長い対話の第一歩だと語っています。証言を聞いた学生達からは、「本や歴史の授業からは学べない体験者の生の声に衝撃を受けた」「核兵器の人間への影響について初めて深く知ることができた」といった声が複数寄せられました。同時に、寄せられた感想の中には、「核兵器のある世界での平和はありえない」といった意見もあり、これからの若い世代の役割について考えようとする頼もしい様子も見受けられました。これらの学生の声は、核問題を考える時、きのこ雲の下にいた一人の人間の視点を忘れないことが、いかに重要であるかを物語っています。

被爆者の高齢化が進む今、当館では、コロナ禍でも継承の歩みを止めないためのオンライン環境の整備を続け、一人でも多くの方々に、原爆の惨禍について知り、核問題について考えていただけるよう、方策を模索し続けます。

（平和記念資料館　啓発課）

被爆体験伝承者から

辻　靖司さん（平成27年度（2015年度）から活動／被爆体験伝承者、ヒロシマ ピース ボランティア、広島平和記念資料館平和学習講座講師）

私は、勤務していた会社の地域社会への貢献・ボランティア推進という社風の影響を受け、定年後、当然のように平和記念資料館のピースボランティア活動に関わっていました。そのことから、広島市の平和・被爆体験継承活動に関心を高く持っていました。数十人の被爆者の方の被爆体験証言講話を拝聴してきましたが、「被爆の実態」を通じて核廃絶・世界恒久平和を訴える講話は、説得力のある講話です。しかし、被爆者の高齢化が進み、近い将来に証言講話が拝聴出来なくなる日が来ることから、被爆体験伝承者1期生に応募しました。

1期の研修生は23名の被爆体験証言者の講話を拝聴することができました。私は10名の方の証言を受け継ぐべく研修していましたが、研修期間中に2名の方が体調を崩され、8名の方の伝承者となりました。これだけ多くの証言者のお話を受け継ごうと決意したのは、小学低学年から大人まで幅広い年代の聴講者が良く理解できる伝承講話をするためには、沢山の引き出しが必要だと強く思ったからです。

私は松島圭次郎さん、寺前妙子さん、岡田恵美子さん、寺本貴司さん、兒玉光雄さん、中西 巖さん、細川浩史さん、北川建次さんの被爆体験を伝承していますが、そのうち4名の方との悲しい別れがありました。

故松島圭次郎さんは被爆時16歳。爆心地から2km離れた学校で授業中に被爆しました。自分より大けがを負った友人を赤十字病院へ連れて行き、猛火の広島市中を御幸橋、皆実町、段原を経由して脱出。海田市駅まで歩いて逃げました。戦時中のご家族の状況についても話を伺い、戦争は大人から子供までみんなを不幸にすることが良く理解出来ました。

故岡田恵美子さんは被爆時8歳。国民学校3年生の時、爆心地から東へ2.8kmの尾長町の自宅の庭で、二人の弟さんと一緒にB29爆撃機に手を振っていた時に被爆しました。岡田さんはピース ボランティア1期生でもありました。自ら千羽鶴を折り、国内外への献納を通じて平和・被爆体験継承に取り組まれた姿勢は、私たちの模範とするところです。また、「オバマ大統領に広島に来てもらって、被爆の実態を見ていただくよう、要請の手紙を書く」といった具体的な活動の提案もされ、強い感銘を受けました。私もオバマ大統領へ手紙を書きました。

故寺本貴司さんは被爆時10歳。国民学校5年生の時、学童集団疎開先から病気のため帰っていた広瀬北町の自宅（爆心地から1km）で被爆しました。被爆時に一緒にいたお母さんは、9日後の8月15日に亡くなりました。私は、当時の寺本さんと同じ年頃の子どもたちに講話をすることがあります。同じ年頃ですから、戦争をしていた苦しい時代の生活と現在の楽しく生活が出

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
被爆体験記の執筆をお手伝いします

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、「被爆の記憶を体験記として残したいけれど、文章にまとめることが難しい」といった方などから聞き取りを行い、体験記としてまとめる被爆体験記執筆補助事業を行っています。完成した体験記は追悼平和祈念館に登録し、館内で公開します。令和２年度までに 160 名の方から聞き取りを行いました。

今年度最初の聞き取りでは、現在追悼平和祈念館で開催している企画展「わが命つきるとも―神父たちのヒロシマと復活への道―」の制作に協力いただいた、カトリック広島司教区の司祭、深堀 升 治さんからお話を伺いました。深堀神父は８歳のときに、南 観音町の自宅から、お使いで近所の人の家に向かう途中で被爆しました。爆風で飛んできた石がお腹に刺さって亡くなった人がいたことや、母親や弟と避難する道すがら、コールタールのような黒い雨に打たれたこと、やけどした大勢の人の背中にうじがわき、それが黄金のように光って見えたことなど、原爆がもたらした被害や惨状について話されました。

被爆後の暮らしや人生についてもお話を聞きました。深堀神父は戦後、毎週日曜日にミサに参加するため、徒歩で 幟 町 の教会に通われました。高校生のとき、長束の修練院で、自分の道を決める「選別の黙想」に参加し、神父になることを決意されました。修練院の院長だったアルペ神父が「お金持ちではなく、１ペソの寄付をしてくれる貧しい人たちが一番愛を知っている」と話されたことが、特に印象に残っているそうです。

聞き取りの様子

証言活動については、「自分の役務として、生きている限り続けていく」という深堀神父。次の世代へ向けては、「平和とは何か。言うだけではなく、自分に何ができるのかを考えてほしい。その積み重ねが平和につながる」と話されました。

広島県内にお住まいで執筆を希望される方、気軽にお問い合わせください。

【お問い合わせ】国立広島原爆死没者追悼平和祈念館／ TEL（082）207 － 1202

来る環境を比較しながら、平和学習をしていただきたいと思っています。

故兒玉光雄さんは被爆時12歳。県立広島第一中学校1年生の時、現在の国泰寺町一丁目にあった校舎の教室で被爆しました。爆心地から876mの距離です。放射線障害により2か月間寝込み、60歳を過ぎると直腸ガン、胃ガン、甲状腺ガンになり、また、16回におよぶ皮膚ガンの手術を受け、その闘病生活を乗り越えながら証言活動に取り組んでおられました。兒玉さんは特に、被爆者の染色体異常が被爆2世へ与える影響について危惧しておられました。また、被爆者のガン、原爆小頭症、そして被爆が人の意識や生き方にまで影響を与えた事など、被爆にまつわる様々な問題について、重要な研究課題の問題提起をされました。

亡くなられた証言者のご遺族からも資料やご連絡をいただくことがあり、活動の励みになっています。単に被爆体験の記憶を受け継ぐだけでなく、遺族の強い思いも引き継いでいくことが、伝承活動において重要なのではないかと学ばせていただいております。

被爆体験伝承者は現在、広島市内だけでなく、日本全国へ派遣されて講話を行っています。海外に派遣されることもあります。私はロシアのボルゴグラード大学で英語での伝承講話を行い、生涯忘れることの出来ない貴重な体験をし、幅広い知識を深めることが出来ました。英語教諭だった松島圭次郎さんは生前、体調を崩されながらも、私の講話の英文の添削を事細かにしてくださいました。恐らく、ご自分がいなくなった後にも、その体験を受け継いで語ってほしいという強い思いで、最後の力を振り絞られたのではないかと想像しております。その思いに応えるべく、継続的な努力を重ねないといけないと自覚し、私も日夜英語の訓練を頑張っています。英語講話後のアンケートでは、アメリカ、イギリス、カナダなど英語圏の聴講者から嬉しい評価をいただいています。また、2016年のG7広島外相会合の際には外国人記者に英語で伝承講話をする機会があり、当時の岸田文雄外務大臣や湯﨑英彦広島県知事も会場に来られ、励ましのあいさつと握手をいただきました。その講話の様子は全国各地で放送されたようで、方々から連絡をいただき、改めて英語での伝承講話の重要性を認識しました。

ボルゴグラード大学での講話

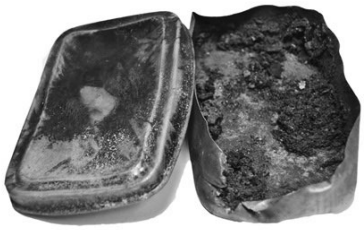
今後の伝承活動の課題としては、次の伝承者の育成があります。私も70歳代となりました。貴重な「被爆体験証言者・松島圭次郎さん」の伝承講話を継続させるためには「1期生伝承者の次の伝承者の育成」が緊急の課題なのです。また、高齢化が進む被爆者が3年間指導して伝承者を育成するのは大きな負担です。先輩伝承者が研修をアシストし、相談を受けるなどして、伝承者を育てていくといった制度も必要ではないかと思っています。

「新着資料展」を開催しています

期間　令和3年3月26日（金）～令和4年3月（予定）
場所　平和記念資料館東館地下1階　特別展示室
資料　令和元年度に寄贈された被爆資料等176点

広島平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝えるための貴重な資料として、被爆者やその遺族が保存されている被爆資料の収集・保管に努めています。令和元年度（2019年度）は、新たに47人の方から、4,758点の寄贈がありました。その一部を展示しています。

戦後76年が経過し、被爆資料や資料にまつわる詳細な情報の収集が次第に困難になっています。資料館では、核兵器廃絶のため、原爆がもたらしたさまざまな被害を将来にわたり伝えていきます。被爆資料の当館への寄贈について、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。



山根秀雄さん（当時 12 歳）の遺品となった弁当箱。秀雄さんは建物疎開作業現場で被爆し、そのまま行方不明となった。
（寄贈　山根芳枝）

【お問い合わせ】
平和記念資料館　学芸課／ TEL（082）241－4004

平和記念資料館令和3年度第1回企画展
焼け跡もの語り

期間　令和4年2月13日（日）まで
場所　平和記念資料館東館1階　企画展示室

おしゃれなふたが残る化粧品の瓶、中身がまだあるビール瓶、モダンなデザインの時計－焼け跡に残っていたこれらのものを見ると、人々が暮らしの中にささやかな楽しみや癒しを求めるのは、戦時下だった76年前も今も同じであるように思われます。たとえひどく変形していても、当時の人々が私たちと同じ感覚

変形した化粧クリームの瓶
（寄贈　中村利代）

を持って暮らしていた部分があることを感じさせます。

今回の企画展では、原爆の後、広島の焼け跡で見つかったものを手がかりに、当時の人々の暮らしや思い出をたどります。ものを変形させた原爆の威力のすさまじさを紹介しつつ、焼け跡に残っていたものが人々にとってどんな意味を持っていたのかを紹介します。

展示構成

・「もの」からたどる暮らし
・たった一発の爆弾で－熱線と火災
・がれきの街
・焼け跡で見つけた思い出

【お問い合わせ】

平和記念資料館　学芸課／ TEL（082）241－4004

海外からの来訪者が発信するメッセージ

～平和記念資料館芳名録より抜粋、日本語に訳したもの（仮訳）を掲載しています～

フェミ・グバジャビアミラ／ナイジェリア連邦共和国下院議長

今日私は、ヒロシマ、そしてそれにまつわるあらゆる事柄を目の当たりにしました。全人類はこのような悲劇と悪が二度と起こらないようにしなければなりません。世界に平和を。　（2019年11月9日）

アーティフ・アル・タラウネ／ヨルダン下院議長、アラブ議会連合議長

広島と長崎の被爆を伝える平和記念資料館を訪れる機会を得ました。

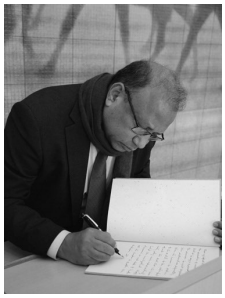
この悲劇は、科学とエネルギーは、壊滅と破壊のためではなく、世界と人類のために利用されるべきであることを示しています。

戦争の恐怖を世界に思い起こさせ、戦争ではなく平和を推進するためにこの資料館を開館した日本の皆様に感謝します。

無慈悲な殺人を犯しながら、民主主義と人権を標榜する者たちは自らを恥ずべきです。

（2019年11月21日）

タヅル・イスラム／バングラデシュ自治省大臣



子供のころから、核兵器のもたらした破壊について聞いていたが、今日、実際に直接目にする機会を得た。

被爆の実相は、あたかも戦闘の中に身を置いているかのような混沌とした状況を伝えており、世界中の人々に間違いなく教訓を与えている。

人類たるもの、誤解を解くには戦争ではなく協議あるのみ。世界各国の人々が、広島の破壊からこのことを学ぶよう願う。

（2019年12月4日）

アンドレ・スピテリ／マルタ共和国常駐特命全権大使

戦争と核兵器の恐怖を経験した人々のことを忘れてはならない。

マルタは、戦争を糾弾し、平和と対話を推進するため、広島市民、また日本国民と共にある。

歴史におけるこの忌むべき出来事の記憶が薄れることなく、人々に戦争の恐怖を思い起こさせることを願う。　（2019年12月11日）

ピエール・フェリング／駐日ルクセンブルク大公国特命全権大使

今朝、私は深い悲しみを覚えました。

1945年8月6日、美しい貴市で起きた出来事を、資料館で目の当たりにしたからです。

皆で手を取り合って、このような苦しみが二度と繰り返されないようにしましょう。

（2019年12月18日）

トーマス・バッハ／国際オリンピック委員会会長

オリンピック・ムーブメントは、世界の平和の中心たる広島と広島の人々に思いを致し、敬意を表します。

ここに我々は平和への決意を新たにします。

（2021年7月16日）

広島市・安芸郡外国人相談窓口
外国人市民の生活相談コーナーが新しくなりました

今年4月から、外国人市民の生活相談コーナーが、「広島市・安芸郡外国人相談窓口」として、広島市に限らず安芸郡4町（府中町、海田町、熊野町、坂町）に住む外国人市民のみなさんにもご利用いただけるように

なりました。

また、毎週金曜日にフィリピノ語の相談日も新たに設け、中国語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、英語、フィリピノ語で対応できる相談員が、行政機関への各種届出や困りごとの相談に応じます。

毎月第2金曜日の午後1時30分から午後4時まで、出入国在留管理局職員による出張相談も行っています。（事前予約制）

その他、広島市へ引越してきた外国人市民のみなさんには、広島市での新しい生活に関する情報を相談員が提供します。

ぜひご利用ください。

【連 絡 先】 TEL（082）241－5010
Email　soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場　　所】 広島国際会議場3階　国際交流・協力課内
※今年8月に国際交流ラウンジ（1階）から移転しました。

【時　　間】 月曜日～金曜日／午前9時～午後4時

【対応言語】 中国語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語、英語、フィリピノ語（金曜日のみ）ほか

【休 室 日】 祝日、8月6日、12月29日～1月3日

～ウチも、ワシも～

広島市民じゃけえ！

―外国から来て広島市民になった人にお話を伺いました―

マーク・マクフィリップスさん

今年8月末まで広島平和文化センターの国際交流・協力課に常駐していた、広島市国際交流員のマーク・マクフィリップスです。イギリス・マンチェスター出身です。サッカーの本場の出とはいえ、実はスポーツは苦手な方で、むしろ語学の方に子どもの頃から惹（ひ）かれ、大学に入って日本語・中国語を専攻しました。そのため19歳の時に生まれて初めての海外滞在として東京に1年留学し、卒業後には広島で就職できました。

東京での留学と広島での仕事、まるで2つの日本を体験したように思うことがあります。今も身の回りには賑（にぎ）やかな都内に憧れて広島から離れる友人もいますが、私は丁度いい大きさの広島で満足。都会の便利を享受しつつも、山も海もすぐ行くことができ、自然を身近に感じています。

広島平和文化センターと長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）が平和・軍縮教育に関する連携を拡充

公益財団法人広島平和文化センターと国立大学法人長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）は、これまでも互いに連携･協力してきました。今後、平和・軍縮教育に関する研究ならびに普及についての連携を拡充することにより、共通の目標である核兵器廃絶及び平和の推進に貢献することを目的として、5月13日（木）、オンラインで両センターをつなぎ、連携協力に関する覚書を締結しました。

オンラインを通じた覚書締結式
（左：RECNA 吉田センター長、右：当財団小泉理事長）

連携協力事項は、

（1）本財団が運営する「広島・長崎講座」事業に関し、RECNA が実施する現況調査及びニーズ分析に関すること

（2）「広島・長崎講座」での活用に向けた、RECNA による平和・軍縮教育教材・モデルカリキュラム等の作成・提供に関すること

（3）平和首長会議の加盟自治体への平和・軍縮教育等に関する情報の提供に関すること

（4）その他、連携協力の目的を達成するために必要と認められること　としています。

両センターの連携の事例として、4月に開設した平和首長会議のホームページに核兵器に関する資料室に RECNA の資料を掲載している他、平和首長会議のニューズレターに広島市立大学の平和研究所に続き、6月号から RECNA から寄稿していただいています。

今後本財団は、本覚書の締結により、同センターとのさらなる連携・協力を図り、核兵器廃絶及び平和の推進に向けて貢献していきます。

オンラインを通じた締結式の概要

（1）日　時　令和3年5月13日（木）10:30 － 11:30

（2）出席者　公益財団法人広島平和文化センター　理事長　小泉（こいずみ）　崇（たかし）
国立大学法人長崎大学核兵器廃絶研究センター　所　長　吉田（よしだ）　文彦（ふみひこ）

日常生活の話はここまでにしますが、広島に移住してきたイギリス人として、取り上げずには済まないことが、被爆の歴史です。何も知らない状態で来た訳でもないのですが、この地に来て、初めて平和記念資料館などへの訪問や被爆体験を語る英文のネイティヴチェックをさせていただくことによって、恥ずかしながら漠然としていた理解を深め、初めて「リアル」に感じ、広島の思いを受け止めました。

その意味では、「平和」には「知る」ことが大事だと思います。国際交流･協力課に配属された当初は、「なんで平和関連財団に国際交流の部署が？」と思うことがあり、主な業務だった学校訪問がどこまで意味があるか気になっていましたが、やはり早い段階で子どもに外国人を身近な存在として感じてもらえれば、その後の偏見や「他人化」する（例えばまるで相手を同じ社会の構成員でないかの如く扱ったり、他人行儀に扱う）ような考え方には結びつかないでしょう。相互理解の不足が紛争の原因になることは、それぞれ違う文化で育った外国人市民同士の友達の間の喧嘩（けんか）から、民族間の偏見まで、様々な場面で見えてくると思います。

少子高齢化と外国人材受入れが進む中、変化し続けてきた日本は、これから更に変わっていくはずです。日本社会が多様になっていくに伴い、異文化コミュニケーション能力の向上や多文化共生の価値観を根付かせること、そして外国人を他人化するような考え方からの脱却が、重要になってきます。そんな中、個々の市民や市民を支える行政に最も求められるのは、「柔軟性」、「革新性」（新たな社会の変化に柔軟に向き合うこと）だと思います。

（令和3年8月）

広島平和文化センターで働いている人ってどんな人？

「広島平和文化センターって何をしているの？」「働いているのはどんな人？」という疑問があるのではないでしょうか。

職員へのインタビュー記事をお届けします。今回は、昨年10月の採用で現在は国際部平和首長会議運営課所属の杉山 歩（すぎやまあゆみ）さんに、国際部国際交流・協力課の廣瀬（ひろせ）ケーナが話を聞きました。

「平和首長会議」とは、共に核兵器廃絶と世界恒久平和への道を切り開こうという広島・長崎両市の呼び掛けに賛同する世界の都市（自治体）で構成する超党派のNGOで、平和文化センター内に事務局があります。

杉山さんは主に「子どもたちの“平和なまち”絵画コンテスト」と「平和教育ウェビナー」を担当しています。

（廣瀬） 平和文化センターに就職したきっかけや経緯と、広島の印象を教えてください。

（杉山） 私は大学で歴史学（アジア近現代史：主に1930年代のインドネシア）を専攻しました。学ぶ中で、やはり少しでも自分の専門に関係し、かつ、社会貢献や公益にかなった分野で仕事がしたいと思うようになりました。でも、そのような仕事をどう見つければいいか分かりませんでした。ある日ふと、「原爆資料館」「採用」でネット検索してみたところ、偶然、広島平和文化センターの公募情報が出ていました。実はその時はまだ、平和記念資料館を平和文化センターが管理運営していることさえ知りませんでした。

11か月たって、かなり広島にも慣れました。私の地元には自然が少ないので、大きな川が6本も流れる緑豊かな街は今でも新鮮に感じます。必要なものがコンパクトに揃（そろ）っている生活に便利な街という印象ですね。

（廣瀬） 杉山さんの大学卒業は今年3月。昨年10月以降、学業と仕事の両立をしていたわけですね？

（杉山） 入職時、卒業まで残すところ卒論の提出のみの状態でした。担当教授に相談して、広島で卒論を執筆して期限内に提出すれば卒業出来るよう認めてもらいました。広島に移る段取りをした上で両親や友人に報告したので、みんな驚いただろうと思います。

（廣瀬） 新任で仕事をするだけでもとても大変だと思います…同時に卒論まで書くなんて、私にはとても真似できません。

（杉山） 私の仕事は比較的ワークライフバランスがとりやすかったので、夕方5時過ぎに仕事を終え、6時には家の机に向かって卒論の執筆開始、夜11時頃まで取り組むという生活が可能でした。それでも、執筆が佳境に入った時期と仕事の繁忙期が重なったときには、食事はデリバリーで頼む等してやりくりしました。オンラインデリバリーが普及した年だったので助かりました。

（廣瀬） 現在の担当業務について教えてください。

（杉山） 「子どもたちによる“平和なまち”絵画コンテスト」は、平和首長会議加盟都市の子どもたちを対象に、平和教育の充実を図ることを目的とした事業です。4月から絵を募集し、12～1月に入賞作品を選定、その後、表彰を行うとともに平和首長会議会長賞受賞作品をプリントしたクリアファイルを記念品として贈り、広島市内に入賞者がいる場合は表彰式も開きます。世界中からたくさん応募があるので、特に11月以降は私たち裏方スタッフの作業量も膨大で大変です。でも、作品を総覧した時や記念品が出来上がった時には充実した気分でした。また、作品に地域ごとの傾向があることが興味深かったです。「中東は明るい派手な色が好きなのかな」、「日本は上品な感じ」、「ロシアは丁寧で精巧なものが多いな」とか。文化背景の違いが出ているのかなと感じました。これも多様性というのでしょうか。忙しい中でも、ホッコリする瞬間がありま

したね。

もう一つの「平和教育ウェビナー『世界の青少年による平和活動交流会』」は、国内外の青少年が、自分が携わる平和活動について発表し、相互に意見交換を行う事業で、YouTubeでライブ配信します。スピーカーの人たちは主に10代20代ですが、発表はとても示唆に富んでいます。自分の同世代と協働するのは楽しく、前途ある彼らが輝けるように、一生懸命サポートしたいと思っています。

（廣瀬）忙しそうですが、徐々に仕事にも慣れてきた様子の杉山さんの活躍に期待しています。

施設紹介
広島国際会議場
ー「世界のひろしま」から、未来に発信ー

広島国際会議場は、国際交流の推進と市民文化の向上を図ることを目的として、平和記念公園内に設置されています。1,504名収容の大ホールをはじめ、国際会議ホールや大・中・小の会議室などを備えており、コンサートや講演会、国内・国際会議はもとより、展示会、パーティなど、さまざまな用途に合わせ幅広くご利用いただいています。

各会議室は光ファイバーで接続されておりますので、講演会場から各会議室への配信やオンライン会議・ハイブリッド会議にも対応することが可能です。

6か国語の同時通訳設備などの設備が充実しており、毎年多くの国際会議が開催されています。2019年の国際会議の開催は、平和関連の会議を中心に、会議場としては31件、全国8位の実績を誇っています（大学等も含めると全国19位）。

また、国際的なイベントも多く開催され、2021年5月には東京2020オリンピック聖火リレーセレブレーションの会場にもなり、県民の平和を願う心をつなぎ、世界に発信しました。

こうした国際会議やイベントだけでなく、平和記念公園内に立地している利点を活かし、年間100件以上の修学旅行生の平和学習の場としてもご利用いただいており、被爆の実相を次世代へ伝える一翼を担っています。

広島国際会議場

現在はコロナウイルス感染症拡大の影響を受け、会議の開催に様々な制約がありますが、消毒用アルコールの設置のほか、サーモグラフィや講演者様向けのアクリル板などを無料貸出するとともに、感染対策に万全を期しております。

これからも国際会議場から世界に開かれたまちづくりと平和を願う心を発信していきます。

主要施設の概要

1　大ホール（フェニックスホール）

- 定員：1,504名
- スタインウェイ社のピアノを2台保有。
  格安料金で試奏できる事業を年2回行っています。

大ホール（フェニックスホール）

2　会議室

- 国際会議ホール（ヒマワリ）：600 m^2
- 大会議室（ダリア）：650 m^2
- 中会議室（コスモス）：350 m^2
- 小会議室（ラン）：260 m^2
- 会議運営事務室：520 m^2

※スクール形式・シアター形式のほか、各種レイアウトに対応しております。詳細はお問い合わせください。

大会議室（ダリア）

【お問い合わせ】

広島国際会議場
〒730-0811　広島市中区中島町1番5号
電話（082）242－7777
URL：http://www.pcf.city.hiroshima.jp/icch/
E-Mail：eigyo-icch@pcf.city.hiroshima.jp

「国際平和シンポジウム」の開催

7月31日（土）、本財団と広島市、朝日新聞社の共催により、「核兵器廃絶への道～『希望の条約』が照らす新しい世界～」をテーマとして国際平和シンポジウムを開催しました。新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、会場での参加者は募らず、広島国際会議場から無料ライブ配信を行いました。

基調講演とパネルディスカッション

第１部では、最初に、核兵器禁止条約の採択にも尽力された国連事務次長の中満泉さんが「核兵器禁止条約は世界をどう変えるか」と題して基調講演を行いました。中満さんは、「被爆者の方々は核兵器禁止条約の成立において非常に重要な役割を果たした。条約の成立は被爆者のたゆまぬ努力の成果だ」と被爆者の功績を称え、「核兵器のない世界という私達の共通の目標を達成するための前向きな力となるよう、あらゆる努力がなされることを望む」と語りました。

続くパネルディスカッションでは、中満さんのほか、アメリカのオバマ政権時代の国務次官として核軍縮・不拡散を担当したローズ・ゴットメラーさん、京都大学大学院法学研究科教授の中西寛さん、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんが、今後の核軍縮をどう進めるか、被爆地のこれからの役割などについて議論を交わしました。

パネルディスカッションの様子

俳優の宝田明さんと大学生による特別トーク

第２部では、ビキニ水爆実験から着想された日本初の怪獣映画「ゴジラ」の第１作に主演した俳優の宝田明さんと、「核政策を知りたい広島若者有権者の会（カクワカ広島）」共同代表であり広島県福山市出身の慶応義塾大生高橋悠太さん、核兵器禁止条約の推進をめざす「議員ウオッチ」リサーチャーであり長崎県長崎市出身の上智大生中村涼香さんが、「戦争体験を未来につなぐ」と題して特別トークを行いました。特別トークの冒頭で宝田さんは、旧満州・ハルビンで迎えた終戦後、ソ連兵に銃で撃たれ、麻酔がない状態で銃弾を摘出する手術を受けるという自身の凄惨な戦争体験を語り、平和の大切さを訴えられました。また、若い世代で核兵器廃絶について考える場として「KNOW NUKES TOKYO」を設立した高橋さんと中村さんの活動や思いを聞き、「道は険しいかもしれないが、二人の行動力が大きな動きとして花開く」と核兵器廃絶に向けて積極的に活動する若者にエールを送られました。

特別トークを行う俳優の宝田明さんと大学生の高橋悠太さん、中村涼香さん

（平和市民連帯課）

青少年による平和活動報告会を開催

平和首長会議では、広島で平和活動を行う青少年に、活動発表や意見交換を通じて互いの活動を学び合い、今後の活動への意欲を高めてもらうことを目的として、今年3月13日（土）に青少年による平和活動報告会を開催しました。

報告会には当財団のユースピースボランティアなど17名の青少年が参加し、若い世代が被爆の実相をどのように発信していくかなどについて意見交換しました。

報告会に参加した青少年

参加者からは「被爆者の声を直接聞けない時代が来るのを前に、若者が工夫して発信する貴重な機会だった」、「今後は自分たちで、平和活動を行う若者が交流できる場を作っていきたい」といった感想が寄せられました。

また、多くの人に広島の青少年の活動を知ってもらうために、後日、報告会の動画を平和首長会議のホームページ等で発信しました。

※動画は以下のURLからご覧いただけます。

http://www.mayorsforpeace.org/jp/whatsnew/news/210329_news.html

（平和首長会議運営課）

「ヒロシマ平和行政実務者研修」を開催

平和首長会議では、加盟都市の青少年に対し、被爆者の体験や平和への思いなどを学び、交流を深めるために実施している事業への参加を支援しています。その一環として今年3月18日（木）、19日（金）の2日間で「ヒロシマ平和行政実務者研修」を開催し、平和首長会議国内加盟都市の職員13名（北海道旭川市、栃木県栃木市、東京都国立市・多摩市、神奈川県横浜市・寒川町、静岡県富士宮市、京都府綾部市、大阪府豊中市、兵庫県姫路市・加西市、長崎県長崎市、鹿児島県鹿児島市）を招へいしました。

この研修は、国内加盟都市の若手職員に被爆の実相や被爆者の平和への思い、広島の平和推進事業などを学んでもらうことにより、それぞれの地域における核兵器廃絶と世界恒久平和に向けた取組を牽引する人材の育成を図るとともに、国内加盟自治体間のネットワークを築いていただくことを目的としています。

研修では、平和記念資料館の見学、被爆体験講話、原爆被害の概要を学ぶ平和学習講座、広島市立大学広

島平和研究所の永井均（ながいひとし）副所長の講義などの聴講を通じて、被爆の実相を学んでいただきました。また、市長訪問では、参加者が各自治体での平和の取組を報告しました。その他、広島市や平和記念資料館啓発課が行っている平和推進事業の説明を受け、各自治体が抱えている課題などについて意見交換した後、グループに分かれて今後取り組んでいきたい平和推進事業を考え、発表を行いました。

市長訪問

参加者からは「実際に広島の地を訪れて、平和記念資料館の展示や被爆建物を見ることで、平和行政に取り組むモチベーションが非常に向上した」、「我々一人一人が平和を尊ぶ気持ちを持つことによって世論が醸成され、世界を平和に導く可能性があると感じた」などの感想が寄せられました。

今回の研修で学んだことを生かし、各自治体での平和の取組に生かしてもらえるよう、研修に参加した自治体へのフォローアップを図るなど、平和首長会議国内加盟都市間での連携をさらに強化し、国内における平和の取組の活発化につなげていきたいと考えています。

（平和首長会議運営課）

被爆体験証言者及び被爆体験伝承者の委嘱

今年度、本財団は被爆体験証言者35人及び被爆体験伝承者149人を委嘱しました。4月9日（金）に開催した委嘱式は、新型コロナウイルス感染防止策として密を避けるため、証言者、伝承者の順で時間を分けて行い、証言者29人、伝承者71人の出席がありました。

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて委嘱式が中止となったため、2年ぶりの開催となりました。

被爆体験証言者は、修学旅行や平和学習で広島を訪れる団体などに対し、自身の被爆体験や被爆の実相を伝える被爆者の方々です。平均年齢が85歳を超え、身体への負担も大きい中、平和への思いを伝えたいと活動しておられます。

また、被爆体験伝承者は、証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、伝えていく方々で、広島市が平成24年度（2012年度）から養成を始め、27年度（2015年度）から活動が始まりました。

（平和記念資料館　啓発課）

資料展「紙芝居　はだしのゲン　複製原画展」「青葉したたる　平和大通りのできるまで」を開催

2つの資料展を今年3月31日から9月30日まで、平和記念資料館東館地下1階で開催しました。

資料展「紙芝居　はだしのゲン　複製原画展」は、作者の中沢啓治（なかざわけいじ）氏から平成23年（2011年）2月に寄贈された「紙芝居　はだしのゲン」の原画を初めて公開する資料展です。32点の原画を原寸大で精密に複製しました。一人で読む漫画とは異なる、大勢の子どもたちが見つめる紙芝居という媒体にあわせて、中沢氏はオールカラーで背景まで丁寧に書き込んでいます。

「紙芝居 はだしのゲン」表紙
©中沢啓治氏

来場者からは、「（紙芝居ならではの表現方法の方が）より一層、ゲンの気持ちが分かり易い」「カラーなので今どきの子どもに馴染（なじ）みやすい」との感想が寄せられました。

資料展「青葉したたる　平和大通りのできるまで」は、今年が広島復興都市計画の策定から75年の節目の年にあたることにちなんで、復興のシンボルの一つである平和大通りの形成過程を昭和二・三十年代の写真で振り返る資料展です。

被爆後の復興計画において、被爆前の建物疎開の跡地に、市の中心部を東西に貫く、緑地を配した街路・平和大通りが建設されました。展示した写真18点は、明田弘司（あけだこうし）氏の撮影です。明田氏は、1952年（昭和27年）春、写真家の名取洋之助（なとりようのすけ）氏から「広島市は原爆ですべて焼き尽くされた。元に戻るのにこれから何年かかるかわからないが、これを記録しなさい」と教えられ、街の撮影を開始しました。また、明田氏は広島県美展の審査員等を歴任、地域の写真文化の発展に寄与しました。

広島原子力平和利用博覧会の看板が設置された平和大通りの空き地で遊ぶ子どもたち
（1956年6月13日　明田弘司氏撮影）

資料展では、明田氏が温かい視線で記録した、「原子砂漠」といわれた焼野原に人力で街路が形成されていく様子を紹介しました。

（平和記念資料館　学芸課）

コロナ禍の中で開催した「へいわこうえん日本語教室」と「日本語ボランティア養成講座Ⅰ・Ⅱ」

へいわこうえん日本語教室

新しく広島市民になった外国人のための日本語教室が昨年9月に初めて開講し、今年度は、春期（5月～）と秋期（10月～）の年2回にコースを増やして開講することとなりました。

日本語で周りの人とコミュニケーションがとれないと、困っていても誰にも頼れずに孤立したり、災害時に大事な情報を受け取れなかったりします。外国人が生活しづらいと感じながら過ごす時間を少しでも短くするため、来日直後のタイミングに日本語教育の機会を提供することを目指しました。

春期の受講者はインド、ブラジル、ポーランド、フィリピン、アメリカ、ロシア、フランス、メキシコから来た10名です。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響が日本語教室を直撃しました。開講予定日は5月7日でしたが、大型連休中に感染が急拡大し、5月6日から市内の公共施設が臨時閉館し、会場が使えなくなったのです。先述のとおり、来日間もない外国人市民にとって日本語学習は生活に直結する切実な問題です。開講延期にスタッフ一同も歯がゆい思いでしたが、何より受講者が一番落胆し、不安に過ごしていることが、対応の中でうかがえました。

このため、実施方法を工夫して、6月からオンラインで授業を始めましたが、母語がバラバラな初学者の場合、先生が指示を出すのも簡単ではありません。一方、受講者は、先生やクラスメイトからの情報を、聴覚だけでなく視覚など他の感覚も動員して一生懸命理解しようとしますが、小さな画面では得られる情報が少なく、スピーカー音が聞こえづらいといった制約もあります。学習意欲を高める楽しいゲームや、気分転換になるクラスメイトとのたわいもないお喋り（しゃべ）も限られてしまいます。

しかし、このような環境の中でも受講者はとても熱心に学習しました。受講者、先生、スタッフの距離が段々と縮まり、7月13日に初めて教室に集まった時には、「わぁ！リアルな○○さんだ！初めまして！」とあいさつや冗談を言い合い、教室のあちこちで笑いの渦が起こっていたのが印象的でした。

直接会えなくてもだんだん仲良くなり、毎回楽しみな教室になりました。

日本語ボランティア養成講座Ⅰ・Ⅱ

地域の外国人の日本語学習を支える日本語ボランティアの養成講座も、へいわこうえん日本語教室と同時期に開講しました。地域の外国人と初めて出会う人向けの講座Ⅰと、サポート活動を始めている人向けの講座Ⅱの2コースです。

今年度は回数だけでなく、講座内容の充実も図りました。日本語の教え方だけではなく、様々な言語で生活相談ができる窓口やボランティア活動への公的支援などの情報も提供し、広島の外国人市民の様々なニーズに市民と行政が協力して対応できる体制づくりを目指しました。コロナ禍の現在、外国人市民にとっても、生活保障や福祉に直結する情報にアクセスできることや、身近な日本人がそういった情報についてアドバイスできることが、とても重要なのです。

日本語ボランティア養成講座は、「まずは外国人と出会って話してみる」ことを目的として対面で開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、一部をオンライン化せざるをえなくなりました。日本語教室の見学やサポート、広島での生活体験を聞くといった、外国人市民との直接の交流の機会が大幅に減ったことはとても残念でした。

なかなか収束が見えないコロナ禍ですが、教室にマスクなしの明るい笑顔が弾け、「リアル」な交流と多くの学びが生まれる日を心待ちにしています。

（国際交流・協力課）

今年度のひろしま奨学金奨学生30名が決定しました

本財団では、市内の大学または大学院に在籍する私費留学生に対し、「ひろしま奨学金」として毎月3万円を1年間支給しています。今年も6月下旬に30名の奨学生を決定しました。

この「ひろしま奨学金」制度は昭和63年度（1988年度）から始まり、作年度までに1013名へ支給しました。広島市出捐金（しゅつえんきん）及び市民・団体から寄せられた寄附金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、運営していますが、昨今の金利低下により、財源は大変厳しい状態となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

令和２年度にご寄附いただいたみなさま

（敬称略・順不同）

国際ソロプチミスト広島（33年継続）、一般財団法人多山報恩会（27年継続）、公益社団法人日本産業退職者協会広島支部（15年継続）、橋本真知子氏（9年継続）、匿名5人

【ひろしま奨学金に関するお問い合わせ】

国際交流・協力課／ TEL（082）242－8879